



第12号

発行
H22年1月7日

- ☆ 発足十一周年記念講演
- ☆ 勉強会報告
- ☆ 第十一回総会報告

1 3 6

- ☆ 第四回勉強会のお知らせ
- ☆ 次回講演会のお知らせ
- ☆ 編集後記

6 6 6

発足十一周年記念講演

細谷 亮太 氏

『小児科医が考える生と死』

第十一回「みえ生と死を考える市民の会」記念講演は、七月十八日(土)、三重県総合文化センターのフレンテみえ・多目的ホールにおいて開催されました。当日、会場には会員と非会員を合わせ、四百名を越える方々が参加されました。講演に先立ち、TMNYによるハーモニカ演奏が行なわれ、澄んだ音色に心が癒されたとの声も聞かれました。その後記念講演会が行なわれました。

今回の講師には、聖路加国際病院副院長の細谷亮太氏をお迎えしました。細谷氏は東北大学医学部を卒業後、聖路加国際病院小児科に勤務されました。七八年からは三年間におたり、テキサス大学M.D.アンダーソン病院がん研究所で、クリニカルフェローとして小児がんの先端的治療を研究されました。現

在は聖路加国際病院で、小児科部長も兼務されています。おもな著作には『細谷先生のわくわく子育て』『医者泣くということ』『いいこともいいことがし』『おにいちやんがいてよかった』『医師としてできること できなかったこと』『命のノート』などがあります。小児科医として活躍する傍ら、句作もなされており、『生きるために一句』という著作もあります。

講演ではまず、ご自身が医師を志すようになった経緯について話されました。聖路加国際病院の小児科をNHKが取材した番組の映像を交えながら、医師になられた後に関わってこられた、病氣と闘う子どもたちやそのご家族との多くのエピソードについても語られました。生と死にどのように向き合えばいいのかについて、示唆に富むお考えをうかがうことができました。以下に、講演の要旨を掲載いたします。

私の祖父と父は、山形で開業医をしています。そのため、子どものころ、周りの人は私が医者になることを期待していたようです。

しかし、父は、医者になる必要はないと私に言っていました。私の家系には僧侶も多かったため、私自身は僧侶になることを考えたこともありません。人のためになる職業に就きた



いと思ひ、テレビ番組の影響もあって、弁護士にაცოგაれたこともありました。しかし、身近に弁護士や僧侶はいませんでした。また、夏目漱石は「道楽と職業」という講演のなかで、道楽（自分がやりたいこと）と職業を一致させることができる人はめったにいないと述べています。私も音楽が好きでしたが、それで身を立てるのは無理だと思いましたが、最終的には身近にモデルになる人がいた医者になろうと思ひ、医学部に進学しました。小児科医を志したのは、医学部を卒業するころ、お年寄りの考え方は今の自分にはわからないが、四、五歳の子どもの気持ちには寄り添えるのではないかと感じたからです。

日本では、一年間におよそ百万人が死に、四十万人ががんになります。そのため、大人の二、三人に一人はがんと関わることになります。しかし、大人のがんは、早期に見えれば治る場合も多いです。子どもも毎年百万人ほど生まれますが、そのうちがんになるのは三千人位です。しかし子どものがん（正確にはほとんどは肉腫）は、治りにくいのです。化学療法が開発されて、状況はかなり改善されましたが、それでも再発、転移などによって亡くなつていく子どもは多くいます。そこで、「トータル・ケア」という考え方が重要になってきます。

トータル・ケアという概念は、ファーパーという医師が提唱したものです。それは、輸血、感染症のコントロール、合併症の処置、



精神衛生面の指導、家族の経済問題の解決など、様々な点から病気の子どもや家族にアプローチしていこうという考え方で、非常に示唆に富むものです。そしてそれを実現するためには、医師、看護師、訪問看護師、ケースワーカー、小児心理士、薬剤師、栄養士、病棟看護師、チャプレンなどが協力し合いながら、患者や家族に向き合うことが必要です。

ところで、子どもの死因として、がん以外では、自殺が多いことを見逃すことはできません。私の知人でも、十二歳くらいで息子が自殺してしまった人がいます。非常に優秀な

お子さんでしたが、あるときから、先にもふれた漱石の小説にのめりこみました。漱石でも、『吾輩は猫である』『坊っちゃん』などを読んでいるうちはいいのですが、『それから』『行人』などに耽溺するようになり、その結果「人生はこんなものなのだ」と自分なりに解釈して、自殺をしてしまったのです。このことから言えるのは、頭の中だけで、いわばバーチャルな仕方で人生、生の意味を理解したつもりになつてはいけないということです。人間は実際に生活をしていくなかで、物事を考えていかなければならないのです。

医療の話に戻ると、病気になった人のなかには、治る人もいれば、治らない人もいます。医学がいくら進歩しても、治せない病気はたくさんあるのです。そのなかで、小児科医を含めた医療者の役割は、それらの人たちをいろいろな面からサポートすることです。ケースワーカーやチャプレンも、その一端を担っています。私の病院に勤務していて昨年亡くなった西村先生というチャプレンの奥様から、次のように記されたカードをいただきました。

「神よ、変えられないものを受け容れる心の静けさと、変えられるものを変える勇氣と、その両者を見分ける英知をお与えください」。やがては死ななければならぬ人間がもつべき知恵として、これはとても大切なことだと思ひます。

勉強会報告

平成二十年 度 第四回勉強会

「語り合いの会」

日時 平成二十一年二月二十二日(日)

十四時〜十六時

場所 三重県総合文化センター

フレンテみえ 生活工房

昨年度最後の勉強会は、「医療や介護に
連する日頃の悩みを語り合い、また情報交換
をする場にしよう」と始めた参加者同士で語
り合う会でした。初めての試みです。

この日の参加者は受付で語り合いテーマ
を選び、それをもとに大きく四つのグループ
に別れて席に着きました。料理上手なスタッ
フによる手作りお菓子とお茶をいただきなが
ら、どのグループも和やかに語り合いが進ん
でいきました。「この会を待っていた」との声
も聞かれました。予定時間があつという間に
終わってしまうほど、どのグループも熱い想
いや日頃のうっ憤を語り合う場となってい
たようです。

最後に、各グループの語り合いについて全
体で報告会が行われました。親の介護につ
いての悩み、主介護者である家族に対する想
い、悲嘆を乗り越えることについての考え、亡
くなった家族へのあふれる想いなど、語られ
た内容は様々でした。他のグループの発表にう

ななく笑顔あり、発表者の話に涙や笑い声あ
りの温かい時間は流れ、冬の日の語り合いの
会はお開きとなりました。

やはり、自分の思いを親身になって聞いて
くれる人たちの存在は大きいと、改めて感じ
ました。皆さまの身近にも、話を聞いてうな
ずいてくれる人たちがいらつしやいますか。

(文責 西出りつ子)

平成二十一年度

○第一回勉強会

「亡き我が子に導かれて」

死合わせの中の幸せ

講師 鈴木中人氏(NPO法人いのちを

バトンタッチする会代表)

日時 平成二十一年四月十九日(日)

十三時〜十四時半

場所 三重県総合文化センター

生涯学習センター視聴覚室

今回講演を聞かせていただいて、とても気
持ちが震える思いでした。

私は看護学生なので、病院実習で白血病の
子どもさんを受け持たせていただいた経験が
あります。その時の子どもさんの様子や、そ
の子の父親や母親、祖母の姿が浮かび、実習
中に聞いた家族の辛い心情等を思い出し、胸
が締め付けられました。鈴木さんのお嬢さん
の様子を表現する一言一言から、お嬢さんが
どれだけ一生懸命に「生きて」いたのか、ま

た特に家族の中での「命」というものの尊さ、
大切さ、愛おしさを実感することができまし
た。

鈴木さんが「もう苦しめたくないで延命
治療はやめてください」と言つたけれど、医
療者はやめることなく体を拭いたり酸素を調
節するなどの介入をしたとのことでした。で
も後から、医療者の人たちはお嬢さんを「今
を生きている患者さん」として、たとえ意識
がなくとも声をかけながら介入してくれてい
たことに気づいたとおつしやられました。
私も、たくさんのチューブに囲まれている家
族の姿を見ることは、本当に辛いだろうと思



います。「今までずっとずっと一生懸命に頑張ったこの子が、どうしてさらに頑張らなければいけないのか？」と、思ってしまうかもしれない。でも、やはり一番大切にしたいことは、鈴木さんもおっしゃった「今を生きている」ということなのかもしれません。たとえ意識がなくても「今を一生懸命生きていく」目の前の人が少しでも楽になるように、少しでも淋しくないように、自分のできる精一杯のことをすることが一番大切なかもしれないと感じました。

また、幼稚園に行ったものの体調がすぐれず、再び病院に戻ったときに、お母さんの気持ちの思い「ごめんね」と謝った鈴木さんのお嬢さんは、とても「根っこ」のある方だと感じました。本当に相手のことを大切に思うからこそ顔を出す「根っこ」だと思います。私は今回の講演を通し、自分に様々な問いかけをすることができました。私もお嬢さんのように、「根っこ」のある、「今を大切に生きることが出来る」そんな人になりたいと思いました。他の人を本当の意味で大切にすることが出来るようになるために、まずは自分の命・人生から大切にしていきたいと思えます。(大岩ひかる 三重大学医学部看護学科学学生)

今回の講演を聞かせていただいて、命はかけがえないものであり、その命を自分と与えてくれた両親に感謝の思いを持ち続けて生活していくことが必要なのだと感じました。

自分のしたいことを何となく行っているのは、自分を支えてくれていた皆さんの人がいるからであると思えてきました。

講演で、「有難い」「有難い」を見て、確かに、困難があつた時、それを乗り越える時、その過程で「有難い」と感じる出来事があります。励まし、支え、協力してくれる人の存在、その存在の大きさに気付くことができ、人は感謝できるのだと思います。人は一人では生きていけません。一人では何もできないのです。どんな時も、そばにいる人に感謝の心を持って関わっていくことが大切なのだと感じました。すべての人が「ありがとう」を表現できるようにになれば、生きる喜びを感じられる世の中になるのだと思います。私も「ありがとう」と思ってもらえるように、他の人のことを考え、「寄り添う」ことを大切に生きていきたいと感じました。

また、今自分がこうしてここに生きていることは、家族のつながり(命のつながり)があつたからです。「家族」は当たり前のようにいますが、どんな時でもキーパーソンとなります。もちろん私にとっても、家族はかけがえない存在です。私が成長するにつれて祖父母は小さくなつていき、家族が「死」に向かっていることを実感します。人は誰でも死にます。しかし、最後の瞬間まで「生」を感じていられるように、その人が「人間」であることを忘れずに接していくことが大切なのだと思います。医療者がどんな時も、声を

かける、話しかける、それだけでもその人と家族のつながりは深まるのではないのでしょうか。「死」が家族にとって終わりではなく、始まりとなるような関わりが重要なのだと思います。

(向井綾香 三重大学医学部看護学科学学生)

○第二回勉強会

講演「三重県での小児がん診療と患者支援の現状」と「語り合いの会」

講師 堀 浩樹氏

(三重大学大学院医学系研究科病態
説明医学講座 小児科分野医師)



日時 平成二十一年九月十三日(日)

講演会 十三時〜十四時半

語り合いの会十五時〜十六時半

場所 三重県総合文化センター

フレンテみえ 生活工房

今年度のテーマは、「こども」であり、鈴木中人先生の勉強会に始まり、細谷亮太先生の記念講演会、そして本日は堀先生による三重県での小児がん診療と患者支援の現状についての講演であった。内容としては、大きく三つのお話であった。

一つ目は小児がんの特徴であり、大人のがんに比べて頻度は少ないが、抗がん剤治療などの効果があり、適切な治療により八〇％は治ることなどであった。二つ目は三重県の小児専門医療についてであり、小児科医不足が叫ばれるなか、病院小児科の集約化と拠点化が進められている。三重県内では病気の種類により三重大学附属病院、国立三重中央医療センター、三重病院、あすなろ学園、草の実学園などを拠点に治療を行っている。三つ目は、小児がん診療上の課題についてであった。たとえば、「小児がんの子どもにも病気についての真実を伝えるべきか？」という課題である。大人が告げられても苦しいことなのだから…と、昔は子どもの力を過小評価し、伝えることはタブーとされていた。しかし堀先生らは、親の同意を条件に、年齢に関係なく入院している子どもたち全員に病気について伝

えている。適切な治療をすれば、八割は治る小児がんであるが、その治療は厳しい。その厳しい治療は、真実を知らずには乗り越えることもできないし、医療者が親子と一緒に頑張っていくためにも、真実を伝えておくことは重要である。また、患者は子どもであるので、成長発達の過程にある。がんという病気を経験しても、その後もできるだけ、あるべき姿に成長できるようにサポートが必要であり、子どもたちが生まれてきた意味を感じて欲しいと考えている。

講演会終了後は、今年度第一回目の「語り合いの会」であった。堀先生を中心に、小児がんと闘うお母さんたちのグループと「今の自分の健康について考える人」のグループとに分かれて一時間程、語り合う時間をもった。会場では、真剣な面持ちの時も、笑い声が聞こえる時もあり、手作りのケーキやお菓子とお茶で、心あたたまる有意義な時間を過ごすことができた。

(文責 辻川真弓)

○第三回勉強会

「緩和ケア病棟見学会」

日時 平成二十一年十一月二十八日(土)

十時〜十二時

場所 松阪厚生病院 緩和ケア病棟

松阪厚生病院緩和ケア病棟見学会を行い、これで県内四箇所の緩和ケア病棟すべてを見

学したことになりました。三重県がん相談支援センターとの共催で行い、約四十名の参加がありました。四箇所の緩和ケア病棟にはそれぞれ特徴がありました。今回見学させていただいた緩和ケア病棟は、松阪厚生病院という精神科を中心に発展した病院の一部であり、松阪市内の交通も便利な場所にありました。がんの終末期には、身体症状だけでなく「うつ状態」などの問題も生じやすいのですが、精神科を基盤にした病院にあるため、精神科医のサポートを受けやすい状況にあるという利点があるように思いました。また、施設も整っており、「その人がその人らしく過ご



すことの支援」を指している取り組みも紹介していただきました。がんの治療にはお金もかかり、緩和ケア病棟に入る時点では、それまでに多くの支出をされている患者さまがほとんどです。そういった状況でも、なるべく緩和ケア病棟を使いやすいものとするために、二十床の八割が室料無料となっていることでした。

緩和ケア病棟相談窓口 0598-29-1311

(文責 辻川真弓)

第十二回総会報告

日時 四月十九日(日)

場所 三重県総合文化センター

司会 加藤

1. 会長あいさつ(大西)
2. 総会の議長指名(議長 橋本)
3. 平成二十年度活動報告(辻川)
4. 平成二十年度決算報告(種田)

収入 1,770,626円

(うち講演会収入 463,500円)

支出 750,699円

(うち講演会費 415,278円)

差引残高 1,019,927円

(次年度繰り越し)

5. 平成二十年度会計監査報告

(会計監査 森多佳美氏、町本実保氏)

6. 規約の改正

活動の実情に合わせ、規約の改正案が提出

された。

第五条(役員構成)

書記を二名から三名に変更する。

7. 役員承認

(新役員)書記 大市 三鈴氏

井戸本睦美氏

奥山 敦 氏

8. 平成二十一年度活動計画案(辻川)

9. 平成二十一年度予算案(種田)

収入 1,605,927円

支出 1,605,927円

*以上について、すべて承認されました。

♪ 第四回勉強会のお知らせ

今年度二回目の語り合いの会を開催いたします。医療や介護のことなどについて、日頃の思いを語り合い、情報交換をする場です。手作りのお菓子とお茶もご用意いたします。

日時 平成二十二年二月二十一日(日)

十三時から

場所 三重県総合文化センター 中会議室

♪ 次回講演会のお知らせ

日時 平成二十二年七月十日(土)

十三時~十五時

場所 三重県総合文化センター

フレンテみえ 多目的ホール

講師 町永俊雄氏(NHK・エグゼクティブ

アナウンサー)

*医療者と患者の間のコミュニケーションのあり方を中心にお話いただく予定です。

編集後記

明けましておめでとうございます。本年も、どうぞよろしくお願いいたします。

七月の記念講演は、小児科医の細谷先生がお引き受けくださいました。そこで、講演会前後の勉強会のテーマも、「子どもの死」に焦点を当てました。病气や死と隣り合わせの子どもの話が多くりましたが、それらにふれるからこそ、健康や生について真剣に考えることができます。そして、子どもたちの健康な生活を考えることが、親や周囲の大人たちが自分の生き方や生活を振り返ることにつながります。これをきっかけに、もう一度ご家族と話し合う機会をお持ちいただければ幸いです。

また、今年度も鈴鹿市の「風の街の文化祭」で「医療相談コーナー」を実施しました。今後の活動についてアイデアやご希望があれば、事務局にお寄せください。活動に反映させていきたいと考えております。

(編集委員 今泉、西出)